

一匹狼で暮らしていた頃を思い出す。いつも気になっていたある人のことを思いながら暮らしていたあの頃を。

私は何もせずにじっと待っていた頃を、何故か感傷に浸ることができない。そんなに苦しみを感じていたのが私には何もできないというこの証拠で在るのではないのかと思っている。綺麗事なんて嫌い。それが私の全て。

鳥籠に残された餌たちが腐っていく中、あの鳥だけ何もできないことを知っていた。だからその鳥に全て知っているのだから、と、答えてあげればよかった。それだけ空は偉大で、鳥はその雄姿を映すそれが私のことを助けていた。いつも一人で気になっていた人をそうやって鳥人化させてしまうのはどうしてだろう。

島にはもう誰もいない。私の姿を覚えているのはたったの一人。あの人がいた頃に知り合った人だった。

もともと私は喋る口じやなかったから何もできなかったけど、それでも世界の真ん中にあの人と一緒にいた娘が私を救ってくれたのが今でも嬉しいとなぜか零してしまう。涙はとうに枯れている。そしてくうを舞った世界の中できつと一人で暮らしているのが今でも笑っているんだと思う。

ころころと、球は転がる。人生の歯車は廻る。そして転がっていくのは誰の瞳？ 私の傍にいた人はもういないの？

異世界に願った。共に居てほしい人を望んだ。私は一人が嫌だった。独りが嫌だった。

それでも一人で暮らしていた頃を思いだして。一匹狼だなんて強がりと言っている自分が情けなかった。笑っても何もできないのが酷く笑えた。そして世界は願いを叶えてくれた。

島に帰ってきた人が、私のことを女王と呼んだ。王様なのだから、この世界を護ってほしいとよくわからないことを言い出した。私は何もせずにその人のことの指示に従う。そして気付けば、世界の中心で私は幻想という言葉を知った。この世界はこの島の中。

一人が消えていく。二人になってしまった。独りを忘れた。忘却された記憶は私の下にはもうない。

それが怖かった。いつものように気ままに暮らしているほうが良かったと今でも後悔している。

だから願った。異世界は笑うかのようにもう二度も願いを叶えることはないと言っている。それでも願ってしまったことは必ずかなってしまう。それを知っているから。

私の下にいた人はこの島を異世界と呼ぶにもう普通の島と言っている。だから船が来る期日まで私の下にいます。

そして私はわかった。わかってしまった。もう昔を失ってしまったのだと。

一匹狼を失った。

月に願うこの民族の最後の風習を失った。

そして独りを失った。

私は笑っているのかな？ 私は泣いているのかな？

その人に私は尋ねた。だけど、疲れた笑みで慰めてくれるだけ。

いつしか、私は船がやってきたときにそれだけ失ってしまったのだから。私を知っている人はもういないけど、それでも未来に自信がついたんだ。

これはまだ始まりなんだと思えばそれでいいと。そう思えた。

そんな自分が面白かった。そんな自分が楽しく思えた。そして何より。

愛するあの人を私は捨てることができたんだ。

さよならを告げるために異世界があるんだとしたら、私は感謝をしなければならない。

いつものように海を見つめている。だけど、あの島にはもう誰もいない。

船から見つめている景色を時々思い出すだけでいい。

そして独りを失ったのだと、改めて感じた。それが私の幸せの形なんだと。

今、知った気がした。